# “ 頼まれる ” ことの難しさ

府国保連合会嘱託　　亀井　励

相見互いで、人にものを頼むこともあれば、頼まれることもあります。頼まれるのは、その人が私を信頼してくれているからで、頼まれて悪い気はしません。どれだけ頼まれ甲斐のある働きができるかは別として、自分の及ぶ範囲で、できるだけのことはしようと思います。

そんなに手間をかけなくても自分自身の努力や、電話一本の依頼で済むこともあります。そんな場合は、たいてい首尾もよく、感謝されることが多いのです。しかし、相手方に出向いたり、多少の無理をきいてもらったり、面倒なことも多々あります。もともと自分ではできないから頼んでこられるわけで、簡単ではないのです。

それでも、ことが希望どおりに進行すれば、頼んでこられた人も「ありがとう。うまくいった」と喜んでくれるし、頼まれた私も幸せで、めでたく一件落着します。困るのは、ことがうまく運ばなかったときです。「お世話になったけど」と、不首尾の報告があった場合は、こちらも素直に「力不足で」と、あやまり、一緒に善後策を話し合ったりできます。

しかし、大方は、あからさまに不満をぶつけられたり、そうされるのはまだ良いほうで、多くは当方には何の連絡もなく、陰で不平不満を言いふらされたりします。私としては、できるだけの努力はしたので、結果がうまくいかなくても、責任を追及される立場ではないという思いです。ところが、いつの間にか私が悪者になってしまっています。お互いに不愉快な気持になり、それまでうまくいっていた二人の関係も悪化してしまいます。

贈収賄事件のように、金銭が絡んだ話は別として、私たちの日常生活における「頼み、頼まれる」関係というのは本当に微妙です。私も頼みごとをすることがあるのだから、できることなら頼みを聞いてあげて、うまくいくように努力したい。けれど、いつもうまくいくとは限らない。それを承知で引き受けるかどうか、ということです。

何度も失敗を重ねて、安易ではありますが、頼まれるのは見通しのはっきりしているもの

だけにしよう。難しそうなものまで気安く引き受けるのはよそうという気持になりました。そのかわり、私の持っている知識の範囲で、どういう持って行き方をすれば事態がいい方向に進行するか、を一緒になって考えることにしました。いけませんかね。